The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	地域研究から地域間研究、外国学研究へ ： 南アジア研究の視点から
Author(s)	山根, 聡
Citation	EX ORIENTE. 2023, 27, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◎特集　外国学の地平

地域研究から地域間研究、外国学研究へ

――南アジア研究の視点から――

山根　聡

1. はじめに

小文は、外国語教育を基盤とする諸外国の言語や文化に関する研究としての「外国学研究 Foreign Studies」の意義について、わが国における地域研究の歴史を概観しつつ、筆者が研究対象とする南アジア地域研究の流れを中心に検討する。日本における地域研究は、大学において「外国語学部」が担ってきていた。それは、研究対象となる地域の言語を習得することを念頭に置きつつ、その言語運用能力を活かして地域の諸相を検討することから、外国語学部がこの分野において最適と考えられたと考えられる。日本における南アジア研究は、第二次世界大戦前にその萌芽が認められるが、戦後もしばらくの間は英語文献に頼らざるを得ない状況が続いた。1960 年代以降、インド諸語を習得して現地の一次資料を解読する研究者が育つと、南アジア研究は飛躍的に進展した。地域研究は当初の戦略的観点や開発の問題意識を脱し、総合的な地域文化の理解のための学問分野として発展してきた。それでもなお、「地域」という概念には、中心地と異なる異世界、周縁的地域という発想があったことは否定できない。それは歴史学などにおける「ヨーロッパ中心主義」が、ヨーロッパと非ヨーロッパという領域区分を可能とし、「地域」とは非ヨーロッパ的な異文化社会であって、地域研究がまさに非ヨーロッパ研究として想定されがちであっ

た。

外国学は、学術におけるヨーロッパ中心的な概念を取り払った時に成立するもので、そこには文明における先進、後進の区別はなく、それぞれが独自の言語文化を持っていることを前提とする。たとえば、地域経済をモデル化して検討したり、欧米で検討されるモデルで地域が議論されるのでは、ヨーロッパ中心主義的視点から離脱できない。本稿で論じる外国学は、地域の論理を「そのまま」理解し、地域の特殊性を「そのまま」把握するのである。だがそれが結果的に他地域との比較の視座へと導くことを目指すこととなる。

2. 地域研究

(1) 境界を超えた地域、地域の境界

2020 年春、新型コロナウィルスの感染が世界規模で広まりだすと、各国はまず、人的交流の抑止が感染防止につながると判断し、他国とのみならず、自国内においても人と人との交流を自粛させる措置に出た。これが感染抑止に一定の効果を上げると、経済活動を復活させようとしている。ただし、世界は「自粛期間」を挟んで前の時代に戻ったのではなく、「新しい生活様式」を掲げて、グローバル化の在り方を再検討するに至った。たとえば、国境を超えたオンライン会議が新型コロナウィルス感染拡大以降急速に社会に浸透するなど、生活様式に大きな変化が生じている。

こうした流れのなかで「地域」をめぐる奇妙な現象が起こった。2020 年春に大阪府で近隣県への移動が制限されたとき、兵庫県との県境に居住する住民は、道路を挟んだ他県への買い物をどうするのか悩んでいる、と報じられた。同様に、「首都圏」での自粛解除を決定する際、政府の諮問委員会は、設定した解除基準を満たしていないのが神奈川県のみとなり、わが国の経済を担う首都圏全体の自粛解除を、都府県ごとに対応するかが問題となった。ウィルスが県境を意識して感染を拡大・収束するべくもなく、巨大な経済圏で通勤圏内にある「首都圏」を都県で区切って基準を図ることに限界があるのは明らかなこ

とであった。つまり、人の移動や経済活動によって形成されている「首都圏」という地域概念は「界隈」のような語彙同様に明確な境界を持たないが、通勤客の移動実態や商業施設等の利用状況など諸条件によって、他地域とは異なる、首都圏としての地域的特性を持っているという当たり前の事実を再認識することとなったのである。地域が行政上の境界を超えたり複数の行政区分にまたがる場合もあれば、地域として想定される境界のあり方は、確定的ではないのである。

感覚的な地域概念と行政区分の差異は、一国の歴史や社会を研究する上でも当てはまる。筆者が研究対象とするパキスタンについても、「パキスタン史」といえば 1947 年にイギリスから独立して誕生した国家の歴史ではあるが、独立以前の歴史、特にこの地域での知識層の形成がなされた 19 世紀後半のイギリス植民地期や、独立直前の「パキスタン運動」などの考察なしには語れないし、独立後の歴史も、3 度の戦争を経験したインドや、対ソ連戦争において政治・経済的に深くかかわったアフガニスタン[1]やイランなど周辺国との外交関係など「地域」という枠組みを語らずしてこの国の歴史の記述は完結しない。ここに一国史を相対化する地域史という概念が可能となる。そして、国家という枠組みにとらわれることのない「地域」を研究する「地域研究」という研究手法が成立する。

(2) わが国における地域研究

地域研究という言葉が共有されて久しい。この研究手法は戦後のアメリカにおいて「地域の専門家」を育成し、蓄積された情報を国家戦略に利用しようとする目的で設定され、従来の文献学では把握できない地域固有の文化を、人類学などのフィールドワークを加えることによって把握することを目指している[2]。国家戦略に基づいて始まった地域研究は、歴史研究の場合、当初の政治的意図とは別に、一国史を相対化する学問としての意義を持つ[3]。国家の領域を超えた、国家成立以前のより広い地域における言語や歴史、社会や政治、経済を研究することは地域研究にとって自明の意義であり、当該地域の言語資料

を用いることは必然となる。そして地域研究で得た成果をまとめ、地域「間」研究としてより広い視点に立った場合に、グローバルヒストリーのような新たな学問分野が生まれてくることになる。

わが国ではすでに戦前、地域研究の萌芽ともいえる機関が複数設立されていた。1929 年、中国文化を中心とした学術研究を目的として、外務省から助成金を受け、東京と京都に東方文化学院が設置され、それぞれ東京研究所、京都研究所と呼ばれた[4]。これらも国家戦力のもとに設置されたものであった。1938 年 4 月に東方文化学院が改組され、京都研究所は独立して東方文化研究所となった。この所長には、イラン研究の碩学羽田亨などが名を連ね、京都大学における西南アジア研究の基礎が築かれた。この翌年の 1939 年、京都大学人文科学研究所が設立され、文学部、法学部、経済学部、農学部の支援を受けながら、人文科学のみならず、産業経済・社会および教育・文化交渉史などが研究されることとなった。他方、1934 年には京都にドイツ文化研究所が置かれたが、これが戦後の 1946 年に改組されて西洋文化研究所となった[5]。こののち、人文科学研究所、東方文化研究所、西洋文化研究所は統合されることとなり、1948 年 4 月に東方文化研究所の管轄が外務省から文部省（京都大学）に移され、同年 11 月にこの 3 機関が統合されて人文科学研究所が発足した[6]。このように、アメリカで地域研究という手法が誕生、定着する以前に、日本では「東方」「西洋」の枠組みでの研究所が設置され、複数の学問分野の研究者による地域の研究が始まっていた[7]。

このような動きは、東洋と西洋の中間に位置するイスラーム地域[8] に関する研究においても見られる[9]。この背景には、満州国の建国があった。満州から新疆など中国西北部への進出を図ることで、日本人はムスリム民族対策という問題に現実的に直面することになった［山室　2001: 126］のである。日本人ムスリムで北京に滞在していた川村狂堂は、1927 年に北京で海峡研究会を組織し、月刊誌『回教』を創刊して中国人ムスリムの信頼を獲得していた［山室　2001: 127］。1932 年に内藤智秀、日本人ムスリムの大久保幸次、小林元らによって日本イスラーム文化協会が設立され、機関誌『イスラム文化』が創刊

された［山室　2001: 127］。そして 1938 年に大久保幸次[10] が資金援助のもと設立した「回教圏研究所[11]」や、1941 年に設立された東京帝国大学の東洋文化研究所などがある。戦時中の 1942 年に回教圏研究所が編纂し、刊行された『概観回教圏』の序文には、その刊行の目的を以下のように述べている。

> 「この東方世界の半身は、久しくわれらの間に閑却されていた。その結果、われらの回教圏に関する知識は、極めて貧困となり、概ね猟奇趣味の範囲を出でず、しかも、回教圏と歴史的に対立関係にある西欧より移入された偏見によって歪曲されていた。しかるに、いまや世界史の転換を指導する日本の大いなる立場は、回教圏に関する正しく、広き知識の獲得を、不可欠なる国民的関心事にまで昂めた。けだし、本書の刊行も、そうした時代的希求に応ぜしめんがために外ならない。」［回教圏研究所『概況回教圏』1942: 1］

日本の回教圏研究はアジア進出の国策として進められた[12] が、実際の刊行物の中には、19 世紀初めにインドのカルカッタにあったインド現地語習得機関フォート・ウィリアム・カレッジから刊行されたウルドゥー語の古典的名作『四人の托鉢僧の物語』の翻訳[13] など文学作品の翻訳など文化的価値の高いものも含まれていて、研究者自身は、国策を掲げながらも、個人的に関心のある研究を発表していた面もあった[14]。同時期の 1939 年、京都大学には京都大学人文科学研究所が設置された。

戦後になると、大学と関係の深い地域に関する地域研究を掲げた研究機関が相次いで設置された。1953 年に北海道スラブ研究室が設置された。これは 1978 年にスラブ研究センターと改称された[15]。1956 年に設置された中東調査会[16] は、中東諸国の情報を収集するとともに、外務省の委託によって資料作成を行ってきた。1958 年には社会科学系の研究機関として財団法人アジア経済研究所が設立された[17]。1963 年に京都大学東南アジア研究所、1964 年には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1996 年に東京大学教養学部

後期課程に地域文化研究学科が設置されたことで、地域研究の教育機関が整備された。1982 年には上智大学アジア文化研究所、1998 年に韓国政府の研究し支援を受けて設置された九州大学韓国研究センター、22002 年に九州大学アジア総合研究センター、2005 年に九州大学アジア総合政策センター[18]、2006 年には京都大学地域研究統合情報センター[19]、上智大学グローバル・スタディーズ研究科[20]が開設された。北海道大学のスラブ研究センター、九州大学の韓国研究センターなどは、大学が設置されている地域ならではの、研究対象地域の特殊性を反映している。

現在わが国には地域研究を掲げる教育・研究機関、研究組織、学会、市民団体等が数多く存在しており、これら諸組織を束ねることで、地域研究に関する情報や企画をとりまとめることを目的に、2004 年、「地域研究コンソーシアム JCAS」が発足し[21]、地域研究のさらなる進展を目指して様々な企画が推進されている。

地域研究が研究対象とする地域とは、行政区分によって境界が明確で、相互排他的な国家を対象とするのではなく、複数の国家が相互に乗り入れるようなより広い地域を対象とする。ただし、国際関係論のように国家間の関係性を考察するよりも、むしろ当該地域の特徴的な要素を検討する研究に力点が置かれる。そこで地域研究では、「東アジア」「東南アジア」「南アジア」「中東」「アフリカ」「ヨーロッパ」「アメリカ大陸」などの諸地域が研究対象領域となっている。また、最近では「イスラーム地域研究」のような新たな研究対象領域も設定されている。

(3) 地域研究と外国語教育

こうして、地域研究はわが国で定着し、インターネットで「日本の大学　地域研究」で検索する[22]と、日本の大学で地域研究を学べる大学は 113 にも上る。だが、わが国には「地域研究学部」は一つもないのである。大学院で「地域研究研究科」を掲げているのは京都大学と筑波大学のみで、学部レベルで地域研究を扱っている大学では、その学部や学科名となると、「文学部人文科学

科」（北海道大学）、「人文社会学部地域政策過程」（岩手大学）、「教育文化学部地域文化学科」（秋田大学）、「国際文化学部国際文化学科」（大東文化大学、鹿児島国際大学）、「文学部国際文化学科」（成蹊大学）「文化社会学部アジア学科、ヨーロッパ・アメリカ学科、北欧学科」（東海大学）、「文教育学部言語文化学科」（お茶の水女子大学）、「人文社会学部人文社会学科」（首都大学東京）、「文学部人文社会学科」（中央大学、奈良女子大学）、「言語文化学部言語文化学科、国際社会学部国際社会学科」（東京外国語大学）、「教養学部教養学科、学際科学科」（東京大学）、「人間社会学部文化学科」（日本女子大学）、「国際地域学部国際地域学科」（福井大学）、「地域科学部地域文化学科」（岐阜大学）、「国際関係学部国際言語文化学科」（静岡県立大学）、「国際学部言語文化学科」（中京大学）、「人間文化学部地域文化学科」（滋賀県立大学）、「グローバル地域文化学部グローバル地域文化学科」（同志社大学）、「文学部人文学科」（立命館大学）、「文学部文化構想学科」（大阪市立大学）、「文学部文化構想学科」（関西大学）、「文学部文化歴史学科」（関西学院大学）、「地域学部地域学科」（鳥取大学）、「人間文化学部地域文化学科」（島根県立大学）、「総合科学部社会総合学科」（徳島大学）のように、「国際」や「地域」（特に「地域文化」）をキーワードにしている学部が多いが、最も多いのは「外国語学部」（関西外国語大学、長崎外国語大学、麗澤大学、神奈川大学、名古屋外国語大学、西南学院大学）である。これは地域研究という新しい学問分野にはまずもって外国語の習得が必要条件であるという発想と、新たに独立した学部を創るのではなく、外国語学部の教員が、地域研究に「近い」研究を行っていると判断したからではないだろうか。回教圏研究所が、その目的の如何とは別に、研究の意義として、西洋の価値観を離れ、現地語の資料を用いて直接地域に関わることを掲げたように、ヨーロッパで確立された研究手法に触れつつも、現地語の一次資料を丹念に講読することの意義の中に、地域研究のあるべき姿を求めることに不思議はないのである。なお大学情報のウェブサイトでは、大阪大学は地域研究を掲げる学部や研究科はないものの、人間科学研究科における一部の成果や、旧大阪外国語大学におけるアジア研究会（のちにアジア太平洋研究会と改称）での研

究成果などが、地域研究としての成果を残している。

地域研究が進展した一方で、その限界についての意見もある。秋田は、地域研究が、「それぞれの地域の個性・特殊性にこだわり、結果として、国民国家史観と同種の閉じた構造に退行してしまう」［秋田　2013: 13］点を指摘し、地域間の比較を重視するグローバルヒストリーは、地域の個性の主張に目をつぶりがちな、その地域の外部から影響力や支配力を及ぼす大きな力や、「中心―周辺構造」を必須の要素として検討する［秋田　2013: 13］ことを可能としている点を挙げて、グローバルヒストリー研究による、より広い視野に立った歴史研究の可能性を論じている。たしかに、国民国家と地域は、その規模に違いはあっても、結局、特定の地域の特徴を描出している点で、相似的な性格を持つことは否めない。［濱下　1997: 22］は、「地域研究が空間的に国家研究の方法の応用問題としてのみとらえられかねない」と指摘している[23]。だが同時に、ここに述べたように、こうした国民国家や地域に関する精緻な研究があってこそ、グローバルヒストリーが成立する点を忘れてはならないだろう。国民国家研究、地域研究、グローバルヒストリーは、相互補完的な関係性にあり、国家や地域の研究で得られるデータがより多く、より精確であればあるほど、グローバルヒストリーとしての精確な視点が涵養されることもまた事実なのである。研究者一人一人が、そのすべてを担うことは実質的には困難であって、各地域の詳細なデータを送り出す研究者と、それらを集積して巨視的な視点で人類の営みを論じる研究者の並立的環境が成り立つことが理想的である。桃木が日本の歴史研究が細かな実証的研究に集中するあまり、大きな議論の枠組みを示していない点を指摘したように［桃木　2007: 15-20; 羽田 2010: 9］、秋田が述べているのも、地域研究者とグローバルヒストリー研究者の「分業体制」の確立や維持ではなく、地域研究者自身が、地域の状況のみならず、常に地域間比較や世界全体の同時代の他地域の動向を念頭に置きつつ、地域の論理のみに引っ張られない姿勢を保つことが肝要であると述べているのであろう。

戦後著しく発展してきた地域研究は、国家の枠組みを超えた地域の理解に欠かせない学問分野となっている。先に述べたように、グローバルヒストリーの

ような俯瞰的な視野は、こうした地域研究の積み重ねによって地域間研究が可能となり、両者の視点を持つことによって成立する学問であることは言を俟たない。20 世紀後半以降、国民国家の意義が問い直され、経済活動や移民、ネットワークなど国家の領域を超えた存在に対する関心が高くなっている現在、地域研究やグローバルヒストリーの意義は高まっているが、それは同時に、これらの学問分野を支える地域に関する歴史学や地域研究の蓄積を前提としているのである。

3. 日本の南アジア地域研究

これまでわが国における地域研究全体の流れを概観したうえで、筆者が専門とする南アジア地域研究の歴史を振り返ってみよう。

(1) 地域を研究対象とする研究者の交流

日本の南アジア研究の歴史については、［長崎　2002: 7］にその概要が紹介されているように、当初はインド哲学・仏教学研究をはじめとする古代・中世への集中化傾向があった。「インド学 Indology（英語）;Indologie（ドイツ語）」とは、ドイツの大学などに多く見られるサンスクリット語やパーリ語などの古典文献を精読、研究するインド哲学や仏教学を示すことが多く、こうした学問を探求する学会として「日本印度学佛教学会」が 1951 年に創立されている。こうしたインド文献学と現代インドの政治や社会を研究する分野を区別して、前者を「古代インド学」とし、後者を「現代インド学」と表現する場合もある。

第二次世界大戦後、わが国においても、東京大学では 1950 年代前半に「インド・イラン研究会」が発足し、1954 年には機関誌『インド・イラン評論』が発刊、1957 年までに 6 号が発表された[24]。これを主導したのは加賀谷寛や中村平治など、東京外国語大学（1949 年に大学に昇格）から東京大学大学院に進学した人たちが含まれていた。加賀谷はこの研究会を続けたが、中村は同

時期に東京大学内で発足していた「インド史研究会」にも参加し始めた［インド史研究会の歴史　1998: 6］[25]。また当時から東京大学の教員も、東京外国語大学に非常勤講師として赴き、辛島昇などが歴史学や政治学などを教授していた。こうした地域ごとの研究者の交流が、地域研究の土台となっていた。

戦後間もない 1952 年、東京大学東洋文化研究所の助手であった荒松雄が当時を回顧して、以下のように述べている。

「……しかし、東大の中央図書館に行ってもインド人の書いたインドの歴史の本というのは、まずなかったんですね。それから、インドに関する本というとみんなチャチな概説本みたいなのばっかり。」［インド史研究会の歴史 1998: 3］

当時はインドの現地語資料に触れる機会がなかった[26]。古代インド史研究者を目指していた山崎元一も、「要するに、インドについて何もわからないんだよ。ザミーンダールとは何だとかザミーンというのは何だとか」［インド史研究会の歴史　1998: 7］。1950 年代、文字通り「何もない」時代、多くの若手研究者がインドやイランに留学し、現地語資料とその人々に触れて戻ってきたのは 1960 年代初めであった。

第二次世界大戦後に本格化した南アジア研究ではあったが、その研究の多くは、マルクス主義の影響を受けた歴史研究が主流であった［小谷　2002: 73］。研究ではインドにおける貧困や差別の拡大について、階級闘争の激化が処方箋として暗示されていた［長崎　2002: 7］。また、インドそのものに対する関心は高かったものの、周辺国を含む他地域との比較は、わずかな例を除いては影響力を持たなかった［長崎　2002: 7］。歴史学では、村落共同体論や土地制度史といった、西欧近代の思想家たちのインド論の検討から研究を始めざるを得なかった［小谷　2002: 74］。「当時の日本では現地語の史料にもとづくインド史研究が困難であり、研究視角自体が、西欧近代的なインド認識の枠組によって制約されることとなった」［小谷　2002: 74］のである。

限定的な研究であったわが国の戦後の南アジア研究は、1950 年以降多くの研究者がインドに留学したことで、本格的な実証的インド史研究が開始され

るようになった。これはひとえに、サンスクリット語、ペルシア語、マラーティー語、タミル語、ラージャスターニー語など、多様な言語の一次資料に接して研究を進めた結果［小谷　2002: 74］であった。インド研究では、イギリス植民地であったという歴史的背景のもと、経済分野を中心に英語文献が数多くみられるが、歴史研究はもとより、文学作品や政治家による現地語での演説など、現地語資料が地域研究に深みを増していることは言を俟たない。たとえば、昨今注目を浴びているヒンドゥー・ナショナリズムの台頭についても、その萌芽期ともいえる19世紀後半のサンスクリット系の語彙のみで書かれたヒンディー語の著作［古賀　1978］は、ヒンディー語とウルドゥー語がそれぞれヒンドゥー教とイスラームの文化的象徴として認識され、分立するようになった時代の貴重な資料で、こうした資料の発掘こそに大きな意義がある[27]。

ちょうど同時期に、それまで展開されてきた、ヨーロッパ中心主義的な学術研究による、英語やペルシア語などの資料を通した「為政者の歴史」に対して、被支配者側の視点で社会を読み直そうとするサバルタン研究が起こり、特に南アジアでは「サバルタン・スタディーズ」として1980年代から活発な研究が行われるようになり、わが国でも注目を集めるようになった。わが国ではこうした研究の成果を「南アジア研究」として同地域のさまざまな学問分野の研究者を集めるために、1967年に全国規模の「南アジア研究集会」が発足、毎年夏に合宿形式でさまざまな学問分野の南アジア研究者によって議論が交わされる機会が持たれた。同様に、関西でも、1970年代に加賀谷寛、濱口恒夫、桑島昭、西口章雄、古賀正則らによって、「南アジア研究会（関西）」が発足し、年に数回、研究会が開催された[28]。この蓄積の結果、1988年には「多種多様な研究成果を、異なった専門分野や異なった地域に関心を持つ全国の南アジア研究者の間で共有し、円滑な学問的交流を保証するような全国的な場をつくり出す」［日本南アジア学会創立趣意書］ことを目的として、日本南アジア学会が発足した。

総合的な地域研究としての南アジア学会が進めた南アジア研究は、しかしながら、「ダイナミックな展開を示しながらも、他方では、きわめて専門化、細

分化しており、何が問題なのか、何をどこまで明らかにしてきたか、非常に分かりにくい有様」［長崎　2002: 4］となってしまっていた。また、ジェンダーや環境、ネットワークや世界システム、歴史修正主義といった一連の新たな研究によって、南アジア研究が対象とする研究分野も広範囲に広がった。南アジアの歴史研究にあっては、藤井毅による言語やカーストをめぐる論争についての再検討［藤井　2003］や、アーイシャ・ジャラールらの研究が従来の歴史観の変更を迫っている[29]。

こうした新たな研究手法の展開を受けて、1998 年から 4 年にわたって実施された科学研究費プロジェクト「南アジア世界の構造変動とネットワーク」（研究代表者　長崎暢子）によって、総合的視点から見た現代南アジア地域研究の成果が 6 巻本で刊行されたことは、南アジア地域研究の画期となった。これは、第 1 巻が『地域研究への招待』として政治学、経済学、伝統思想、文化人類学、世界システム論、イスラーム研究、環境問題、ジェンダー研究、サバルタン研究、ポストモダンなど学問分野における南アジア研究史と課題を提示したうえで、第 2 巻の『経済自由化のゆくえ』、第 3 巻の『民主主義のとりくみ』、第 4 巻の『開発と環境』、第 5 巻の『社会・文化・ジェンダー』、第 6 巻の『世界システムとネットワーク』という構成になっている。これらの書名を見ても、このプロジェクトが、南アジア地域研究における同時代的課題を提示していたことを示している。

その後、南アジア地域研究は、2010 年に発足した人間文化研究機構（NIHU）の「現代インド地域研究推進事業」として実質的に引き継がれた。これは 2014 年までの 5 年間で、複数の研究機関がネットワーク型の共同研究体制を構成するものとなり[30]、研究者ネットワークの構築を通じて研究間の交流と学際的対話が推進された。この成果は、『現代インド』全 6 巻としてまとめられ、「南アジアの構造変動とネットワーク」以降の新たな成果をまとめたものとなっている。このシリーズは、第 1 巻が『多様性社会の商戦』、第 2 巻が『溶融する都市・農村』、第 3 巻が『深化するデモクラシー』、第 4 巻が『台頭する新経済空間』、第 5 巻が『周縁からの声』、第 6 巻が『還流する文化と宗

教』という構成となっている。また、この事業は2016年度から2021年度までの「南アジア地域研究推進事業」として引き継がれた。新たな事業での特徴は、アジア各地域の南アジア研究を行う研究機関を接続して、年に1回、国際シンポジウムを開催している[31]。これは2022年以降、「環インド洋地域研究」事業として、さらに広範な地域間の関係性を研究する取組みとして進められている。こうして、南アジア地域研究は、国内での研究者の交流から、個人的に展開されていた国際的な研究交流が醸成され、組織化させる流れへとつながっている。

こうした一連の南アジア地域研究の流れを見ると、やはり叢書の構成に見られるように、たとえ総合的な南アジア研究を目指していても、学問分野ごとの編成は避けられない。総合的な地域研究は、さまざまな学問分野の成果を結集させることによって成立するのである。

(2) 大阪外国語大学における地域研究

ここまで、わが国における地域研究の概要を、南アジア地域研究の歩みとともに見てきたが、地域研究が進展した一方で、地域研究そのものを呼称として掲げた大学学部教育がないことにも紹介した。このような事態はなぜ起こったのであろうか。それは、大学における人文系学部及び研究科の制度的特徴に負うところが大きい。わが国の教育・研究機関は、東京外国語学校、大阪外国語学校を除いて、ほとんどが学問分野ごとに講座が置かれていたのであり、哲学、歴史学、文学が人文学系の学問を担っていた。このため、「東洋」「西洋」「回教圏」「東南アジア」に関する総合的な研究を行うためには、別途研究所などを設置し、各学問分野から研究対象地域を一にする研究者が集う形をとってきたのである。これに対し、東京外国語学校、大阪外国語学校のような語学教育と研究を基盤とする教育研究機関は、例外的に、言語ごとの学科が講座のように構成されていたのである。

南アジア研究に関しては、1922年の大阪外国語学校創立後まもなく印度語部の大阪外国語学校アーリヤ学会より発刊された『印度洋』、1927年ごろに発

刊された『アーリヤ学会会報』[32] 古典文献学を除いた現代南アジアの政治や社会に関する研究については、第二次世界大戦前に大阪外国語学校で「アーリヤ学会」が主催され、機関誌として『印度洋』『アーリヤ学会会報』が刊行されていた。これは戦後の大阪外国語大学になってからも続けられたもので、わが国における南アジア地域研究の萌芽とも呼べるものであった。中国語学科の『鵬翼』（1925 年創刊）、蒙古語（現モンゴル語）の満蒙研究會の機関誌『朔風』も同様で、異なる学問分野の研究者を研究対象地域ごとに集める手法は、実は大阪外国語学校ですでに始められていたのである。地域ごとに研究者をまとめることがなぜ大阪外国語学校で可能であったかというと、同校およびその流れを汲む現在の大阪大学大学院言語文化研究科の教育・研究の構造が、学問分野ではなく、地域によって区分されていることにある。学問分野ではなく、地域ごとに研究者の単位を作ることで、一地域（言語）の専攻において、「言語、文学、文化・社会」という教員の配置が、一時的な例外を除いて維持されてきたことは、図らずも地域研究の枠組みを維持してきたことにつながったのである。かつて大阪外国語大学時代の大学院においては、「東アジア語学専攻」のなかに「中国語学」「モンゴル語学」「朝鮮語学」が含まれる構造になっていたが、これはまさに、研究する言語に関連した地域の単位でまとめた学科や専攻を形成しており、地域研究でいうところの「地域」に似た領域を示していた。さらに言えば、一つの専攻語が、言語、歴史、政治、文学、社会、文化などのそれぞれを研究する教員で構成されていたことは、総合的な地域像の把握に努めていた姿を映している。このことが、わが国の大学学部教育において、地域研究を掲げるのが外国語学部と重なっている点につながっている要因の一つであろう。こうした諸言語の教育に特化した教育・研究機関であることは、現地語一次資料を読み解くことを当然としてきたのである。この姿勢が、世界各地の諸言語による、口承文芸を含む文学の翻訳や研究の豊かな蓄積を持ち[33]、紀要『大阪外国語大學學報』『大阪外国語大学論集』[34] 刊行のほか、現地語に関する言語学的研究や、言語の教科書、辞書刊行の成果を持つことにつながっている。このほか、英米、北欧、スペイン、ポルトガル・ブラジル、イラン、ス

ワヒリ語圏、中国。南アジアなどの様々な地域に関する関する雑誌も大阪外国語大学時代から引き継がれており、地域研究は引き継がれている。さらに、現在休刊となっているものの、『世界口承文芸研究』は口承文芸に関する一次資料を地域横断的に網羅したもので、様々な地域の研究者が会する一つの研究機関が発刊できるものとしてきわめて特徴的なものであった。『世界文学』もまた、欧米のみならず、これまで中心的に扱われてこなかった地域の文学の諸相を紹介、分析した点で「世界文学」の領域をさらに広げたものといえよう。

上智大学には、1955 年に文学部内に設置された外国語学科が発展した形での 1970 年に大学院外国語学研究科がある。この英語名が Faculty of Foreign Studies であり、ホームページでは、この英語表記の日本語への直訳が「外国研究学部」となっており、この学部の意義について、「実践的な「ことば」のトレーニングによって体得する外国語運用能力を武器に、グローバル社会が求める新しい「知」を切り開くとともに、語学にとどまらず、的確な運用能力を駆使して言語学や地域研究などの専門分野を体系的に学び、言語運用能力と専門分野を融合して多角的な研究を行う」（上智大学外国語学部ホームページ）と説明して、地域研究への発展性を含めている。ここで明らかにしておかなければならないのは、わが国で「外国語学部」の存在が、「語学」教育のみの実践の場と捉えられがちな点である。いうまでもなく、外国語学部において高度な言語運用能力の涵養は最大の目標であるが、それは文法を習得するということだけでないこと言うまでもない。専攻する言語の言語学的特徴を研究する場合もあれば、歴史や文化に関する文献を読む能力を培う場合もあるのであって、その研究の基盤に高い語学力を有していることが求められることから、語学が重視されている。高度な現地語を用いない地域研究に可能性を求めることは不可能であろう。

大阪外国語大学では 1997 年に博士後期課程を含む大学院言語社会研究科が発足したことを受けて[35]、11 月に世界の言語とそれを規定とする文化の学術研究の振興を目的とする「大阪外国語大学言語社会学会」を設立させた。1999 年に研究雑誌『エクスオリエンテ』を創刊させ、現在に至っている。その趣旨

には、「多様な言語を基盤とする世界の多彩な文化を研究するためには、既存の学問分野を超えたグローバルな視野から、研究成果の交流を進めることが極めて重要である」[36] ことが強調され、その 10 年後の 2007 年に大阪大学との統合後、大阪大学言語社会学会と改名して現在も研究活動を続けている。統合時は旧大阪外国語時代のほとんどの教員が「大阪大学世界言語研究センター」の所属となったが、その後言語文化研究科言語社会専攻に改組された。

大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻は、学位プログラム「言語社会」のもと、世界の諸地域の言語と文化や社会に関する高度な専門性、深い学識、教養、デザイン力、そして国際性を身につけた人材の育成を目標として掲げ、専攻する言語の高度な運用能力、言語圏についての広く深い専門的知識、および異文化を理解するための方法論を身につけた研究者の育成を目指している。専攻は言語単位で構成され、講座も、アジアⅠ講座、アジアⅡ講座、アジアⅢ講座、アジア・アフリカ講座、ヨーロッパⅠ講座、ヨーロッパⅡ講座、ヨーロッパ・アメリカ講座といった「言語文化圏」別の構成となり、地域研究の単位と酷似しているが[37]、地域研究との最大の違いは、言語運用能力を活かした研究に力点を置いている点である。

4. おわりに―外国学の展開

現地語資料を発掘して精読し、地域の理解に新たな視座を加える作業において歴史学や人類学が多大な貢献を果たしてきた。その後フィールドワークなどの手法を加えた地域研究が発展した。地域研究が先行研究をふまえて地域の諸相を明らかにし、これを発展させた地域間研究は、地域研究に、より水平的な広がりをもたせた[38]。外国学とはこうした地域の広がりを意識しつつ、「外国」の現地語の一次資料を討究することによって、その地域独特の時空間をより立体的に把握することを目的とするものである。では、外国学研究と地域研究にどのような差異があるのだろうか。

地域研究は当初の戦略的観点や開発の問題意識を脱し、総合的な地域文化の

理解のための学問分野として発展してきた。それでもなお、「地域」という概念には、中心地と異なる異世界、周縁的地域という発想があったことは否定できない。それは歴史学などにおける「ヨーロッパ中心主義」が、ヨーロッパと非ヨーロッパという領域区分を可能とし、「地域」とは非ヨーロッパ的な異文化社会であって、地域研究がまさに非ヨーロッパ研究として想定されがちであった[39]。東京大学大学院総合文化研究科内に地域文化研究分科が設置され、イギリス研究やフランス研究、ドイツ研究、北アメリカ研究がアジア・日本研究や韓国朝鮮研究とともに置かれている状況や、上智大学で地域研究としてフランスやイギリスなどが研究されている状況は、ヨーロッパ中心主義的な学術の流れの中で、地球全体を平たく俯瞰し、すべての地域を「地域」として相対化させる視点を持つという意味で重要である[40]。このような視点は、非ヨーロッパ圏である日本であるからこそ成立しやすい環境にあるともいえる。さらに言えば、世界各地の言語文化を地域差なくとらえている外国語学部や大学院は、まさにヨーロッパ中心的な地域研究と一線を画し、外国（という地域）に対して等しく向かい合うことのできる教育研究機関なのである。

外国学は、学術におけるヨーロッパ中心的な概念を取り払った時に成立するもので、そこには文明における先進、後進の区別はなく、それぞれが独自の言語文化を持っていることを前提とする。たとえば、地域経済をモデル化して検討したり、欧米で検討されるモデルで知育が議論されるのでは、ヨーロッパ中心主義的視点から離脱できない。外国学では、地域の論理を「そのまま」理解し、地域の特殊性を「そのまま」把握するのである。だがそれが結果的に他地域との比較の視座へと導くことを目指すのである。外国学は地域個別の研究でもあり、それを比較する研究でもある。すなわち、そこでは言語、文学、歴史、経済、社会などその地域を形成するすべての言語文化の諸相について個別の研究を総合的に扱い、他地域との比較を意識することで地域に対する理解を深めることを目的とするのである。

2022 年 4 月、大阪大学に人文学研究科が設置され、その中に人文学専攻、日本学専攻、芸術学専攻、言語文化学専攻と並んで、外国学専攻が置かれる予

定である。人文学が社会科学と統合することなく、「人文学」を掲げて研究科を立ち上げ、日本史や日本文化、日本語の研究者が一堂に会して日本を地域として相対化した日本学専攻を設置するなど、人文学における新たな地平を切り開くとき、2021 年に 100 年の歴史を迎える外国学も、言語とそれを基盤とする文化の教育と研究を、より広い視野で展開していく姿勢を示していくべきであろう。

［謝辞］本稿は、科学研究費学術変革領域研究（A）「思想と戦略が織りなす信頼構築」（課題番号 20H05828）および基盤研究（C）「ウルドゥー文学に見られる郷愁とムスリムの宗教アイデンティティ形成に関する研究」（課題番号 21K00456）の成果である。

［注］

1　アフガニスタンは、わが国の外務省では「中近東」の扱いであるが、アメリカでは「南アジア」に含まれている。1979 年末から戦争、内戦の状態が続いていたアフガニスタンは、1985 年に発足した南アジア地域協力連合（SAARC）に 2007 年になって正式加盟するなどなど、国家をその地域の枠組みに組み込むかは異なっている。

2　［長澤　2013: 67］は、地域研究は、研究対象地域との「対話型」の研究であるとしながらも、その研究には研究者が個人的な関心や研究の動機による「私的」な部分と、研究の社会的な位置づけや意味づけを行う「公的」な部分があり、税金によって遂行され、国策に利用される地域研究が、本当に「対話型」なのかという矛盾を抱えることとなる点を挙げ、アジア経済研究所の「調査研究部（のちに地域研究部と改称）」などで、地域研究の意義について盛んに議論された経緯を紹介している。

3　［秋田　桃木　2013: 12］はこの点で、グローバルヒストリーと地域社会論、地域研究に共通性を見出している。

4　京都大学人文科学研究所公式ウェブサイト（http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/about/history.htm）。
設立当初は文学部の一部を利用していたが、1930 年に新所屋が完成した。

5　同所は戦後占領軍に接収されたため、活動は停止せざるをえなくなり、人文科学研究所に帰属することとなった［京都大学人文学研究所公式ウェブサイト］。

6　京都大学人文学研究所公式ウェブサイト。200 年 4 月に人文科学研究所は改組し、社会人類学。西洋思想、日本文化、現代中國、比較文化、宗教史、比較社会、日本学、言語史の小部門を大きな 5 部門制とし、2006 年にはイタリアやフランスの研究機関との連携のもと人文学国際研究センターを設置、2007 年に現代中国研究センターを発足させた。

7　「西洋」の概念について、近藤和彦は「「西洋」といっても、これがどの地域をさすのか、またいかなる概念なのか実は曖昧である」［近藤　1999: 11］と述べ、「東洋」や「西洋」の概念が地理学的な観点であっても固定的でない点を指摘している。

8　「回教圏」「イスラーム世界」に関する議論に［羽田　2005; 2016, 2021］［小杉 : 2006］などがある。「イスラーム世界」に関する研究は、19 世紀末にドイツのアウグスト・ミューラーによって書かれた『東洋と西洋のイスラーム』（1885-87 年初版）が最初の研究書とされる［羽田　2016: 70］。その後 20 世紀に入って「西洋」と「西洋以外」の歴史研究を行ってきたヨーロッパの歴史学会において、「イスラーム世界」という枠組みでの研究が盛んとなり、わが国でも 1960 年代からイスラームに対する関心が盛んとなった。以来、多くの高度な学術成果が発表されてきた［羽田 2016: 72-73］。羽田は、イスラーム世界という空間概念が用いられることにおいて、そうした世界が国民国家同様に実体化される点と、宗教概念の「イスラーム」が地域的な概念である「世界」とつながる点に留意すべきであり［羽田　2016: 74］、こうした概念が政治的な行為となりうる点［羽田　2016: 4］を指摘している。地理的な領域概念である「東南アジア」や「南アジア」「西ヨーロッパ」に比べると、「イスラーム世界の拡大」と表現されるように、領域的境界を超えた伸縮性、可変性を持っている点が特徴的で、概念的である。この点では、「地域」概念が「歴史的には、「帝国」、「植民地」や「勢力圏」として表現された」［濱下　1997: 22］のに対し、イスラームは「帝国」的な「イメージ」で捉えられる［小杉　2006］。羽田は、先行研究における「イスラーム世界」の語義を網羅的に検討したうえで、この語が概念として用いられるべきであると結論付けている［羽田　2021: 334-336］。昨今、アル＝カーイダの分派から発展した「イスラーム国」が、ウンマを「国」と命名し、2015 年にはアフガニスタンやパキスタンを「ホラーサーン州」であると一方的に宣言したのも、国境に関わらず、これらの地域が、彼らが想定する「イスラーム国」という空想の領土に含まれるという解釈の結果であろう。「イスラーム世界」は、「非イスラーム世界」と対比的な空間として想定されるが、それは「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」の逆写しのような空間概念という印象を与える。

9　回教圏研究書所に在籍していた小林元もまた、東洋でも西洋でもない地域概念としての「中洋」という概念を提唱した［山室　2001: 94］。「中洋」の概念は、［梅棹 1974］において、乾燥して自然植生が草原である「中洋」の存在として描かれた。

10　大久保幸次は東京の生まれで東京外国語学校を経て東京帝国大学東洋史学科を卒業、トルコに派遣され、帰国後に回教圏研究所を設立させた［柳瀬　2002: 159］。

11　大久保は 1933 年 10 月に個人的に「イスラム学会」を設立していて、これが回教研究所の母体となった。設立時の名称は「回教圏攷究所」で、1938 年には軍部との関係が深く、ムスリム婦女子への教育を行っていた内蒙古工作機関「善隣教会」の支援を受けて研究所となり、1938 年から『月刊回教圏』が刊行された。1940 年当時の研究所員には竹内好や野原四郎、井筒俊彦のほか、のちに東京外国語大学ウル

ドゥー語教授となった蒲生礼一などがいた［柳瀬　2002: 159］。

12　回教圏研究所の目的は、東亜新秩序建設というわが国の世界政策を具現している［回教圏研究所　1942: 342］と明言されており、東アジアより米英の勢力を駆逐し、日本を中心に東亜に新秩序を建設するにおいて、回教圏の解放が一大推進力となる点を強調している。

13　東京外国語学校の助教授だった蒲生礼一が 1929 年から 30 年にかけて雑誌『回教圏』に連載し、1942 年に単行本として刊行された。

14　蒲生は、［ミール・アンマン　1990］の「訳者序」において、回教圏を「イスラーム圏」と呼び、同地域の研究の意義について、以下のように述べている。「地理的には比較的距離に位するイスラーム圏に関しての研究が、未だ充分なる成果を挙げていない今日、イスラーム圏の文学の如きものが我が国に紹介さるるに至っていないのはむしと当然のことであろう。しからばそれは価値なきがためであろうか。否、然らず。それは我らがいたずらに欧米文明吸収にのみ汲々としてきた結果、一般の関心がこの方面に向けられなかったためであろう」［ミール・アンマン 1990:iv］

15　2009 年には北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターとして、スラブ地域を含む広くユーラシア地域を研究対象とする共同利用・共同研究拠点となった。

16　創設者の中心となったのが、回教圏研究所の調査部長小林元（1904-1963）であった。創立時のメンバーには前嶋信次や山名義鶴が名を連ねた。

17　1960 年には通産省の所管となり、機関誌『アジア経済』が発刊した。1998 年には特殊法人日本貿易振興会と統合し、名称が「ジェトロ・アジア経済研究所」となった。

18　同センターは 2010 年に廃止されたが、2019 年に九州大学アジア・オセアニア研究教育機構が設置された。

19　2017 年に東南アジア研究所と地域研究統合情報センターが統合して京都大学東南アジア地域研究研究所が設置された。

20　研究科は国際関係論専攻、地域研究専攻、グローバル社会専攻が統合された。

21　幹事組織には、京都大学東南アジア研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、上智大学アジア文化研究所、愛知大学国際中国楽学研究センター、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所、大阪大学グローバルイニシアティブセンター、人間文化研究機構国立民族学博物館、日本マレーシア学会、東南アジア学会などがある［地域研究コンソーシアム公式ウェブサイト www.jcas.jp/about/organization.html　（2019 年 11 月 30 日閲覧）］。創設当時、大阪大学世界言語研究センター（当時）もこの幹事校に加わっていたが、言語文化研究科との統合後は幹事校としては大阪大学グローバルイニシアティブセンターのみが加わっている。

22　「ナレッジステーション　日本の大学　地域研究」https://www.gakkou.net/daigaku/

src/?gkm=01008&srcmode=gkm

23　濱下は続けて、「拡散する地域」［濱下　1997: 22］について触れ、複数の国家や地域を内に含んだネットワーク型の「域圏」とも呼ぶべき広がりの存在を指摘している。

24　雑誌名は 1 号から 6 号まで『インド・イラン評論』であったが、1957 年から 1958 年までは『アジア・アフリカ評論』という雑誌名で引き継がれた。

25　インド史研究会を回顧する座談会の記録によると、インド史研究会の発足は 1954 年ではあるが、当時は研究会の名前もなく、1 年後に辛島昇が参加した時にはすでにこの名前がついていたという［インド史研究会　1998: 6］。

26　空襲によってほとんどの書籍が焼失したのは大阪外国語学校も同じであった。

27　［山根　2006］で紹介した資料は、2000 年代になって発見されたラーホールの鉄道局工員の日記で、1947 年の印パ分離独立前後の生活の様子が描かれている。この日記によると、第 1 次印パ戦争が終わって間もない 1948 年にガーンディーが暗殺されたとき、ラーホール市内ではガーンディーの死を悼んで町中の店舗が閉じられていた。国家間の対立の陰で、市民がどのような感情を抱いていたかを知る資料などを探すことは、南アジアの実像をより立体的に照射できるものと考える。同様に、1857 年のインド大反乱におけるイギリスに雇われたインド人傭兵からイギリスに出された情報［Qureshi 1999］19 世紀末のイギリス植民地インドのムスリムがイギリスの文化を受容することで抱いた不安感を描いたウルドゥー文学作品［Aḥmad 2004;Yamane 2021］や、19 世紀末に書かれたムガル宮廷での生活を記録した［Dihlavī: 1865; 井坂・山根　2019］、デリーの滅亡を嘆いた詩集［Kaukab, 1954］、20 世紀初めにムスリムがイギリス統治を批判してアフガニスタンへ移住しようとした宗教的意見書［Alī 1920?］など、南アジアを多角的に捉える資料は数多く残されている。

28　創立時より幹事は大阪外国語大学（現大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻）の所属していた松村耕光（2021 年定年退職）が担っており、現在も不定期ながら研究会を開催している。古賀、桑島、濱口は「インド史研究会」にも参加していた。

29　ジャラールはパキスタン独立の指導者ムハンマド・アリー・ジンナーの再評価を行い、ジンナーが独立国家パキスタンを当初から志向していたという従来の説を退け、むしろ全インド国民会議派の指導者らによって独立を選択せざるを得ない状況に置かれていった経緯を明らかにした［ジャラール　1999］。こうした歴史修正主義の流れは、ペルシア語の文献を再検討した［Alam 2013］や北インドのムスリムのウルドゥー語メディアによる教育を再検討して、ウルドゥー語が北インドのムスリムの教育言語として発展していった過程を検討した［Permau 2006］などに見られる。近年、［Metcalf 1982］や［Robinson 2001］［Green 2019］ら欧米の研究者による現地語資料の再検討を受けて、インドの研究者の間でも現地語資料への関心が高まっている。［Kaicher 2020］のように、ウルドゥー詩に描かれる同時代の空気や雰

囲気を読み解く研究もある。

30　中心拠点は京都大学で、国立民族学博物館が副中心拠点となり、ほかに、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学に拠点が置かれ、6 つの拠点がそれぞれテーマを設定しつつ、拠点間の交流も進められた。京都大学拠点は「環境と政治」、民俗学博物館拠点は「文化と社会」、東京大学拠点は「経済発展と歴史変動」、広島大学拠点は「空間構造と開発問題」、東京外国語大学拠点が「文学・社会運動・ジェンダー」、龍谷大学拠点が「思想と価値の基層的変化」を研究テーマとして掲げた。

31　日本の拠点大学・機関の他に、韓国外国語大学、ベトナムの複数の大学、シンガポール国立大学、タイのチュラロンコン大学などが参加し、日本、韓国、ネパール、タイ、シンガポールですでに国際シンポジウムを開催してきた。

32　『印度洋』は 1927 年の第 5 号が現存し、『アーリヤ学会会報』は 1928 年の 2 号が現存する。『印度洋』第 5 号には、「聖者としてのガンディ」「南亜細亜に就て」「私の観た印度」「日印航路に就て」「印度の宗教に就て」「アフガニスタン事情」「印度目指して」「印度洋の傳説」などのほか、大阪外国語大学学校長を務めた中目覚による「印度洋」、のちに大阪外国語大学教員となった澤栄三による「印度語講座（第 1 回）」や「東方文化の發揚と我國学会の独立を説く」などが掲載されている。『アーリヤ学会会報』は同窓会向けの記事が主体の雑誌で、学生らの創作や、カーリダーサの作品の日本語訳などが掲載されていた［大阪外国語大学論集最終号　2007: 3-4］。

33　世界の諸言語による口承文芸の翻訳紹介には『世界口承文芸研究』1-9 号がある。また世界各地の文学研究の成果として、『世界文学』1-6 号がある。

34　『大阪外国語大學學報』は大阪外国語大学が大学として発足した 1952 年に発刊され、「言語、社会、文化」などのジャンルを設けて年に 2 回刊行されて 1989 年の第 77 号まで続いた。その後、1990 年からは『大阪外国語大学論集』として 2007 年の大阪大学との統合までに 37 号までが刊行された。この最終号は、これまで大阪外国語学校創設以来の刊行物や論文のリストとなっている［大阪外国語大学研究推進室　2007］。

35　言語社会研究科という名称は、旧大阪外国語大学以外には、一橋大学において 1996 年に教養部の改組に合わせて設立されたものがあるが、世界の諸言語の教育と研究を基盤とし、それぞれの専攻語の高度な運用能力を確認する入学試験が課せられる旧大阪外国語大学のそれとは異なっている。

36　大阪大学言語社会学会ホームページ（http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~genshagakkai/newpage1.html）

37　上智大学には、1955 年に文学部内に設置された外国語学科が発展した形での 1970 年に大学院外国語学研究科がある。この英語名が Faculty of Foreign Studies であり、ホームページでは、この英語表記の日本語への直訳が「外国研究学部」となっており、この学部の意義について、「実践的な「ことば」のトレーニングによって体得

する外国語運用能力を武器に、グローバル社会が求める新しい「知」を切り開くとともに、語学にとどまらず、的確な運用能力を駆使して言語学や地域研究などの専門分野を体系的に学び、言語運用能力と専門分野を融合して多角的な研究を行う」（上智大学外国語学部ホームページ）と説明して、地域研究への発展性を含めている。

38　近年刊行されている「歴史の転換点シリーズ」（山川出版社）は、特定の西暦に起こった地域各地での歴史的事件をもとに、人類の歴史を相対的に把握しようとする地域間研究の成果である。

39　学術におけるヨーロッパ中心主義については、［羽田　2018: 55-58］を参照。

40　また、日本を地域研究の対処とする考え方や、アメリカ合衆国で合衆国を地域研究の対象とはならない［羽田　2018: 66］ように、自国を地域として扱う視点は成立していない。

［参考文献］

秋田茂　桃木至朗
「序章グローバルヒストリーと帝国」秋田茂　桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会

井坂理穂　山根聡共編
2019　『食から描くインド　近現代の社会変容と宗教アイデンティティ』春風社

梅棹忠夫
1974　『文明の生態史観』中公文庫

大阪外国語大学研究推進室編
2007　『大阪外国語大学論集』最終号　大阪外国語大学

大阪外国語大学世界口承文芸研究会
1978-87　『世界口承文芸研究』1 － 9、大阪外国語大学

大阪外国語大学世界文学研究会
1995-2001　『世界文学　大阪外国語大学における世界文学の教育と研究』1-6 号

回教圏研究所編
1942　『概觀　回教圏』誠文堂新光社

辛島昇・山崎元一・小谷汪之編
1998　『インド史研究会の歴史』非売品

古賀勝郎
1978　「諺歌百首：バーッラテンドゥ・ハリシュハンドラに捧ぐ」『印度民俗研究』5 巻、印度民俗研究会 pp.51-68.

小杉泰
2006　『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会

小杉泰
2006 『興亡の世界史　イスラーム帝国のジハード』講談社
小谷汪之
2002 「第 3 章　日本の歴史学におけるインド」長崎暢子編『現代南アジア 1 地域研究への招待』東京大学出版会
近藤和彦編
1999 『西洋世界の歴史』山川出版社
ジャラール、アーイシャ、井上あえか訳
1999 『パキスタン独立　南アジア・現代への軌跡』勁草書房
長崎暢子
2002 「序章　南アジア研究の課題と方法」長崎暢子編『現代南アジア①地域研究への招待』東京大学出版会
長沢栄治
2013 「地域研究における私的なものと公的なもの―中東研究の場合」『学術の動向』2013 年 7 月号 pp.67-71.
羽田正
2005 『イスラーム世界の創造』東京大学出版会
2010 「シリーズ特集　歴史学の「国境」 新しい世界史とヨーロッパ史」『パブリック・ヒストリー』大阪大学文学部西洋史学研究室
2016 「第 3 章　イスラーム世界―歴史を語る空間概念枠組みの功罪―」羽田正責任編集『地域史と世界史 MINERVA 世界史叢書Ⅰ』ミネルヴァ書房
2018 『シリーズ・グローバルヒストリー 1　グローバル化と世界史』東京大学出版会
2021 『〈イスラーム世界〉とは何か 「新しい世界史」を描く』講談社学術文庫
濱下武志
1997 「第 1 章　歴史研究と地域研究　歴史にあらわれた地域空間」『地域の世界史（1）地域史とは何か』山川出版社
藤井毅
2003 『歴史のなかのカースト：近代インドの〈自画像〉』岩波書店
ミール・アンマン、蒲生礼一訳　麻田豊補
1990 『四人の托鉢僧の物語』平凡社東洋文庫
桃木至朗
2007 「歴史学の危機と 21 世紀の挑戦」『世界システムと海域アジア交通』（阪大 21 世紀 COE「インターフェイスの人文学」報告書第 4 巻）
柳瀬義治
2002 「戦前期における〈回教〉をめぐる言説。研究序説：同時代の「文学者」との接点を軸に」『近代文学試論』40 号、pp.156-167.

山根聡
2006 「［翻訳］史資料としてのウルドゥー語日記－パキスタン独立時における鉄道局工員の記録―」『大阪外国語大学論集』36 号、pp.91-111.
山室信一
2001 『思想課題としてのアジア　基軸・連鎖・投企』岩波書店
Aḥmad, Nadhīr, Sibṯ-e Ḥasan（ed.）
2004 *Ibn al-Waqt*, Lahore: Majlis Taraqqī Adab.
Alam, Muzaffar
2013 *The Crisis of Empire in Mughal North India: Awadh and the Punjab, 1707-1748.* Delhi: OUP.
ʻAlī, Shāhid
1920?, *Risāla-e Hijrat o Risāa Qurbānī Gā'o*, Lakhnaū: Shams al-Muṯāba.
Dihlavī, Munshī Faiẓ al-Dīn, Walī Ashraf Ṣubūḥī Dihlavī
1965（1890） *Bazm-e Ākhir*, Lahore: Majlis Taraqqī Adab.
Green, Nile
2019 *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*, University of California Press.
Gupta, Narayani
1997 *Delhi between Two Empires (1803-1931)*, New Delhi: OUP.
Kaicker, Abhishek
2020 T*he King and The People: Sovereignty and Popular Politics in Mughal Delhi*, Delhi: OUP.
Kaukab, Tafaẓẓul Ḥusain Khān Dihlavī
1954（org. 1863） *Fughān-e Dihlī*, Lahore:Academy Punjab.
Metcalf, Barbara
1982, *Perfecting Women, Maulana Ashraf Ali Thanawi's Bihishti Zewar*. Berkeley, CA: University of California Press.
Metcalf, Barbara
1982, *Islamic Revival in British India: Deoband, 1860-1900*, Princeton Legacy Library.
Pernau, Margrit
2006, *The Delhi College: Traditional Elites, the Colonial State and Education before 1857,* New Delhi: OUP.
Qureshi, Salimuddin
1999 *Ghadāron ke Khuṭūṭ*, Lahore. Sang-e Meel Publications.
Robinson, Francis
2001 *The Ulama of Farangi Mahall and Islamic Culture in South Asia*, London: C. Hurst & Co. Publishers.

So YAMANE
2021　'Muslim Writers and Food in North India, 1850-1920: Nostalgia and Uneasiness', International Journal of South Asian Studies vol. 11, pp.18-32.

［参考ウェブサイト］
上智大学外国語学部ウェブサイト
https://www.sophia.ac.jp/jpn/program/UG/UG_FS/index.html
京都大学人文科学研究所公式ウェブサイト
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/about/history.htm
地域研究コンソーシアム公式ウェブサイト
www.jcas.jp/about/organization.html
日本南アジア学会公式ウェブサイト
http://jasas.info/history/
南アジア地域研究公式ウェブサイト
https://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/indas/

Area Studies, Interregional Studies and Foreign Studies:
From a Viewpoint of South Asian Studies

So YAMANE

This article aims to examine the significance of "foreign studies" through the study of regional studies and interregional studies in Japan, by giving an overview of the trends of South Asian Studies in Japan. Area Studies in Japan has been carried out by the "Faculty of Foreign Studies" at the universities. It is considered that the Faculty of Foreign Studies was regarded to be the most suitable in this field because it studies various aspects of the region by making the best use of its language proficiency.

South Asian Studies in Japan was found to have sprouted before World War II and for some time after the war, it had to rely on the previous English data or research. But since the 1960s, South Asian Studies in Japan has made great strides as researchers have grown to learn Indian languages and decipher local primary sources.

Area studies such as South Asian Studies has evolved as an academic discipline for a comprehensive understanding of regional culture, moving away from the initial strategic perspective and awareness of development issues. Nevertheless, it cannot be denied that the concept of "region" had the idea of "a different world from the central region", a peripheral region. It is because "Eurocentrism" in history enables the division of Europe and non-Europe, and "region" is a non-European cross-cultural society, and area studies is often assumed as non-European studies.

"Foreign Studies" can be established when the Eurocentric concept in academia is removed, and there is no distinction between advanced and backward in

civilization, and it is premised that each has its own language culture. For example, if intellectual education is discussed by modeling and examining the regional economy, or by using a model that is examined in Europe and the United States, it is impossible to depart from the Eurocentric perspective. In foreign studies, we understand the logic of the region “as is” and grasp the peculiarities of the region “as is”. As a result, it aims to lead to a perspective of comparison with other regions.